

岩湧山系の林道沿いの溪流で、凍っている滝を見ようと近づいていくと...

10mほど先の溪岸あたりから **猛禽** が飛び立ったのです！

「オオタカ」や「ノスリ」よりも、さらに「トビ」よりも大きい個体に見えました。

残念ながらすぐに樹林の奥へと飛び去ってしまいましたが、「クマタカ」だったのかも知れません。

そして、その猛禽が飛び立った場所に行ってみると...

どうやら「ヤマドリ」の雄を食べている途中だったようです。

周囲にはむしり取られた羽毛が散乱しており、その中に栗色をベースにした見事な尾羽が数本あったのです。

「持って帰りたい」という衝動に駆られましたが、これはあの猛禽君の獲物で、しかも「食事中に邪魔された」と怒っていることでしょうかから、その場を乱すことなく立ち去ることにしました。

さて、見事な尾羽を持つ「ヤマドリ」は、キジ科の日本固有種です。

低山で通年生息しているのですが、警戒心が非常に強く、人の気配を感じるとすぐに逃げ去ってしまうようで、姿を見る機会は稀です。

飛鳥時代（7世紀後半）の歌人、柿本人麻呂は

「あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の ながながし夜を ひとりかも寝む」

という、恋人に会えず独り寝をしなければならない侘びしさを、歌に詠んでいますね。

ヤマドリの雄と雌は、夜は谷を隔てて眠ると言われていましたので、孤独感を表すモチーフとして使われたのでしょう。

でも実際、ヤマドリは「一夫多妻」の生活スタイルみたいですので、この和歌のようなロマンチックなものではないのかも知れません...

ちなみに「しだり尾」とは、非常に長いために自重で垂れ下がって見える尾のことです。

また、「ヤマドリ」と体型の似ている「キジ」は、飛び立つときはいきなり高度を上げることができず、地面すれすれに飛び出してから徐々に高度を上げていきますので、木々などの障害物がある環境を嫌がります。よって「キジ」は**草原の鳥**と言えるのです。

一方の「ヤマドリ」は、まず垂直方向に飛び出して周囲の木々よりも高い位置に至ってから水平方向に飛び立つ、という技を持っていますので、**森林の鳥**と言えるのです。

このように、両者は見事な「棲み分け」をしているのですね！

写真 : ヤマドリ (雌) 撮影は8月です。(雌の尾羽は、雄の数分の1と短いです)

写真 : ヤマドリの卵 撮影は4月です。(ダイヤモンドトレール近くで発見)

写真 : 猛禽に捕食されたヤマドリ (雄) 撮影は先日(2/9)です。







